
もう限界。

林檎の葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう限界。

【Nコード】

N6194E

【作者名】

林檎の葉

【あらすじ】

コナンはある計画を立てていた。それは、自分の正体を蘭にバラすということ。コナン自身、精神的に限界に近かったのである。蘭がコナンの正体を知った時、蘭はどうするのか？そして二人の関係は——？（この小説は、コミックス47巻の一部のシーンが元になっています）

プロローグ

『ねえ…本当にいいの?』

ここは東京都、米花町5丁目、毛利探偵事務所のとある一室。コナンの手にある携帯から、女性の声が聞こえてくる。今は真夜中。蘭も小五郎も眠っている。

「ああ…もう決めたんだ。これ以上耐えられねーんだよ。オレの方が限界近いみたいでさ。」

女性の質問に、コナンが答える。その表情は、どこか儚げで、切なくて、哀しかった。

『そう…あなたがそう言うのなら、仕方ないわね。あなたが自分の意志で決めたことだもの。』

「サンキユ。」

『あら。珍しく素直じゃない。』

女性のその言葉に、コナンはふてくされる。

「ほっとけ。」

『ふふ。ちよつとからかってみただけよ。』

コナンの携帯からは、この部屋を包み込む重苦しい空気とは正反対の、陽気な声が聞こえてきた。

「あのなあ…今はふざけてる場合じゃねえだろ。」

『わかってるわよ、そんなこと。でもこうでもしないとあなた、自分を責めるでしょう。自分の心がボロボロになるまで、彼女を傷つけた自分を罵るわよね。そんなあなたを、わたしは見ていられないのよ。』

「それは…」

コナンは言葉に詰まる。

『やっぱり凶星か。そうやって自分を必要以上に傷つけて、過小評価するところ、あなたの悪い癖よ。わたしが気付いてないと思ってたの?』

「……………」

コナンは息をのんだ。全部知ってたのか、という驚きと、自分の気持ちを理解してくれていた、という安心感が同時に押し寄せてきたのだ。

「やっぱかなわねーな…」

『当然よ。わたしを誰だと思ってるの?』

「そりゃそうか。」

『とにかく、決行は明日ね。もう一度言うわよ。彼女がどんな反応をしても、あまり自分を責めないでね?』

「…ああ。」

そう言った瞬間、突然コナンの隣から騒音が聞こえてきた。いや、騒音ではない。小五郎のいびきである。

「ぐおおおお… うん。」

「やべ。んじゃ、そろそろ切るぞ。」

『はいはい。じゃあね。成功した時は、例のもの、忘れないでね?』

「へいへい… わあってるよ…」

ピッ
ッ——ッ——

そう言ったコナンの声が聞こえるか聞こえないかというところで、電話は切られた。通話時間、5分47秒。

「相変わらず人使いが荒いぜ… さてと、オレもそろそろ寝るか。」

その時、時刻は2時8分であった。

一方、コナンの電話相手は、電話を切ったあと、沈痛な表情でうつむいていた。

「ごめんね。こんなことしかしてあげられなくて…。本当にごめんなさい。でも、どうか許してあげて。」

女性はそう呟き、部屋を去っていった。

プロローグ（後書き）

初めまして、林檎の葉と申します。

この小説はわたしの処女作です。つまり、初めての投稿なので、駄文かとは思いますが、読んでくださってありがとうございます。

この小説は、コミックス47巻の蘭ちゃんがコナンの正体に気づくもまた上手くだまされるという話で、もし正体がバレるとするならば…という設定で書いてます。また、この小説のコナンは蘭に最初から正体を明かすつもりでいるのでその点を理解して読んでくれると嬉しいです。あと、ストーリーに出てくるコナンの電話相手はこれからストーリーが進むにつれて明らかになります。なんかプロローグから切ないですが、嫌悪感を抱かれた方すみません<>

次のストーリーが決まり次第、なるべく早く第1話を投稿するつもりです。

よかったら評価もしていただけると嬉しいです。

第1話：仕組まれた疑い

翌日、午前8時。天気は曇り。その天気に比例して、毛利探偵事務所に居候中のコナンは、心臓の高鳴りが増すばかりだった。その理由は、コナンが手にしている携帯にあった。コナンは今から、あるメールアドレスを入力しようとしているのだ。そのアドレスは、黒の組織のボスのもの。

ドクン ピッ ドクン ポパポツ… ドクン ピパプパペ…
ドクン ドクン ドクン

コナンは心臓の高鳴りを感じながらアドレスを入力していった。

（やっぱやべーよな… 送信しちゃ…）

とそこへ、蘭が事務所に入ってきた。

「ちょっとコナン君？出かけるから早く着替えてって言ったでしょ？」

どうやらコナンはまだパジャマ姿だったようだ。

「あ、うん…」

ピッ

コナンは返事をする、慌てて携帯の画面を待ち受けに戻した。

「ホーラ！携帯なんかいじってないで…」

タン

蘭はコナンから携帯を取り上げると、テーブルの上に置く。

「寝部屋に着替えを用意してあるから…」

「わ、わかったよ…」

（ま、あせるな焦るな…… そのうち機会は来るさ… 奴らのボスに接触するチャンスは… 必ず…）

蘭は困ったような顔をしている。コナンは立ち上がって、事務所の出入り口に向かった。コナンがついさっきまで手にしていた携帯は、テーブルの上に置かれたまま。コナンは蘭の視線を背中に感じながら事務所を出た。背伸びをして、ドアを閉める。閉めた途端、緊張の糸が切れ、コナンは大きくため息をついた。

（これでよかったんだよな、これで…）

コナンは心の中でそうつぶやくと、自宅への階段を上っていった。

一方、蘭は、コナンが階段を上って行ったのを確認すると、ジーンズのポケットから携帯を取り出した。出かけている間に新一がひよっこり帰ってくるかもしれないと考え、一応メールしておこうと考えたのだ。

【今日はお父さんの仕事の依頼人のところに行く予定　なので連絡は携帯に…　難事件だったらその時は助言ヨロシクね】

そう打つと、送信ボタンを押す。

ピッ　ブルル…　ブルル…

その瞬間、テーブルの上のコナンの携帯が反応した。蘭が不思議に思うのも無理はない。自分がメールを送信した瞬間、送信相手ではないはずの人物の携帯が反応したのだから。

蘭はコナンの携帯を手に取り、開いた。そして蘭は、コナンの携帯に未読のメールが届いていることに気付く。そこで蘭はこう考えた。もしかしたらこのメールは、自分が今送ったメールなのではないかと。

「あ~~~~っ!!!!」

そこに突然、コナンの叫び声が響いた。着替えを済ませてたコナンが事務所に戻ってきたのである。コナンは蘭の手から携帯をひったくると、慌てて携帯を閉じる。

「み、見た？中身……」

コナンはひきつった顔で蘭に問いかけた。

「み、見てないよ…　メールの着信音がしてたから、誰からかなーっと思つて……」

「き、きつと博士からだよ！探偵バッジの修理頼んでたから…」

「へー そう…」

「あ、やっぱり博士からだー！」

コナンはそう言うつと、慌ててドアを閉め、メールを確認する。

（やっぱり蘭から…だな。フッ さすがにここまで来ると自分の演技力を呪いたくなってくるぜ…）

コナンはそつとドアを開けると、蘭の表情を盗み見た。蘭は複雑な表情で考え込んでいる。

（…計画通りだな。）

コナンはそつとドアを閉めると、自宅への階段を上がり始めた。

（ごめん、蘭。本当に、ごめんな。）

第1話：仕組まれた疑い（後書き）

初めまして、あるいはこんにちは。作者の林檎の葉です。

読んでわかるとおり、この話はコミックス47巻のストーリーを9割小説にしただけのものです。しかも駄文で読みにくいかと思います。すみません><

第2話は原作引用とオリジナルが3：7ぐらいにするつもりなので読んでいただけると嬉しいです。

よかったですら評価お願いします。

第2話：もう無理すんな。（前書き）

第1話から時間がかなり飛んで、コミックス47巻FILE・3からのストーリーになってます。それでもいい人はどうぞ。

第2話：もう無理すんな。

事件解決後、毛利探偵事務所にコナンの笑顔があった。

「ごちそうさま——！おいしかった——！」

「んじゃさつさと寝ろよ！もう12時まわってたんだから……」

「は——い！あ、そうだ、蘭姉ちゃん！ちょっと話があるから、ごはん食べ終わったら下に来てくれない？」

「え？」

「おいおい、何言ってたんだ！？ガキはもう寝る時間だろーが……！」

小五郎がすかさず言う。そこでコナンは、あらかじめ用意していた言い訳を口にした。

「う、うん……でも、どうしても蘭姉ちゃんに相談したいことがある……」

（コナンくん……やっぱりあなた……）

「明日じゃダメなのかよ？」

小五郎は聞く。

「う、うん……ちょっと、ね……」

コナンは奥歯にものを挟んでいるようなおどおどした口調で答えた。

「…わあったよ。話が終わったらさっさと寝るんだぞ？」

そんな口調のコナンに、小五郎は諦めたように溜息をつく、了解した。

「うん。いいよね？蘭姉ちゃん。」

「う、うん、まあ…」

「じゃあ、あとでね！」

コナンはそう言つと、部屋を出て行った。

夕食（時間的には夜食？）を食べ終わった蘭は、コナンに言われた通り、事務所に降りていった。ドアの前まで来て、いったん止まる。

（話つて…なんだろう？コナンくんは新一なんだから、やっぱり全部話してくれるのかなあ？それとも、またはぐらかされちゃうかな？そうだとしたら、結構、きついな…。って、負けちゃダメよ、蘭！こっちには、携帯っていう切り札があるんだから！どんなにごまかされたって、この携帯にわたしが今朝送ったメールがあれば言い

訳はできないわ!)

蘭は一度大きく深呼吸をすると、ドアをノックした。

「…蘭姉ちゃん?入って。」

コナンに促され、ドアを開ける。

「話ってなあに?コナンくん。」

「…あのさ。僕の携帯、返してほしいんだけど…。」

「えっ…。」

蘭は目を見開いた。

(返してって…何?全部話してくれるんじゃないの?…ああ、そうか。そうやってあなたは、みんなを騙してきたんだね。)

「蘭姉ちゃん、持ってるでしょ。僕の携帯。」

持ってるでしょ?ではなく、持ってるでしょ。疑問ではなく、はっきり断定していた。

コナンの一言ひとことが、蘭の胸に突き刺さる。

(今回も、そうやってはぐらかされちゃうんだね…)

「そう、だけど。わたしだってよくわかったね。もしかしたらお父さんだったかもしれないのに。」

蘭は自分の心を笑顔で押し隠して答えた。

「わかるよ。だってわざと落としたんだもん。蘭姉ちゃんが拾ってくれるように。」

「…え？」

コナンのその言葉を聞いた瞬間、蘭の思考回路が一時的に停止した。

（……今、なんて言ったの？わざとって、なに…？）

「コ、コナン、くん？」

「ズボンの後ろポケットに携帯を入れておけば、ズレてポケットから落ちるのは予想できるしね。そしてその携帯の中身を、ごはん作ったりお風呂沸かしたりするのに忙しかった蘭姉ちゃんが見てないだろうってことも。」

コナンはあくまでも冷静に、蘭がコナンの携帯を持っているとわかった理由を淡々と語る。その事実が蘭には信じられなかった。

（なに、言ってるの？もう、わけがわからないよ…！）

蘭は停止した思考回路を必死に動かして言葉を紡ぎだす。

「…つまり、わざとわたしに拾わせたってこと？」

「そういつつと。」

「…どうして？」

コナンは蘭の疑問を無視して話し続ける。

「それだけじゃないよ。朝、携帯を置きっぱなしにしたのも、蘭姉ちゃんが中身を見たと思って慌てたのも全部、わざと。…気づいて、なかったでしょ？」

「っ… どう、して…」

（ココロが、はりさけそう。）

蘭は同じ疑問をコナンにぶつけた。

「…もう限界だったから。」

「…限界？」

「そう。蘭姉ちゃんを騙し続けることが、もう無理だったから。」

口調はあくまでも冷静だ。

「…コナンくん？」

「コナン、じゃねーよ。…もう、無理してコナン、なんて呼ばなくていいから。な？…蘭。」

その名前を口にした瞬間、コナンは、時が、止まった。…ように感じた。

第2話：もう無理すんな。（後書き）

初めまして、あるいはこんにちは。林檎の葉です。

今回はなるべく切ない感じにしようと思張ってみたんですが…どうでしょうか？相変わらず駄文ですみません><

この話はあと第3話＋エピローグで完結しようかと思っています。わたしがこれから書くこうとしている小説は、この「もう限界。」がすべて基盤になってくると思います。（以前から考えていたネタがいくつもあるんです）

個人的には切ないのもシリアスなのもダークなのもほのぼのなのも、あとギャグストーリーも何でも好きなので、機会があったら挑戦してみようかと思っています。

よかったですら評価お願いします。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

第3話：告白、そして…

「コナン、じゃねーよ。もう無理してコナン、なんて呼ばなくていいから。な？……蘭。」

口調をガラリと変えたコナン、いや新一の言葉が、蘭の心の奥に刺さる。ズキン。

（ココロが、痛い。）

コナンはさらに続ける。

「お前…気づいてるんだろ、オレの正体に。そうじゃなかったら、そんな顔しねーよな。」

「っ…… しん、いち…？」

「…ああ、そうだよ。オレは工藤新一だ。あの日…蘭とトロピカルランドに行った日に、毒薬飲まされて体が縮んじまったんだよ。」

コナンは、自分の本当の名前を告げた。

「っ…… しん、いちいつ……」

蘭は床に座り込んだ。こらえきれなかった涙が一粒、床へと落ちた。ポタ。

「殴りたいんなら殴っていいぜ。覚悟はできてるから。」

「…何でそんなこと言つの？そんなこと言われたら…怒れないじゃないっ…」

「蘭……………」

蘭の目には、大粒の涙があった。コナンはそれを指でそつと拭う。

「ごめんな、蘭。今まで騙して、泣かせちゃって。本当に、……………」
「めん。」

「もういいわよ、そんなこと。本当のこと話してくれて、わたし嬉しいから。」

蘭の涙は止まっていた。

「…怒らねーのか？」

「だって、体が縮んじやったの、新一のせいじゃないんでしょう？責められないよ、新一のこと。」

「でも、」

蘭はコナンの言葉を遮ると、さらに続けた。

「そんなふうに全部しよい込んだじゃうところ、新一の悪い癖だよ。」

コナンはあきれた口調で言い返す。

「…そりゃオメーもだろ？」

「ふふ。そうかもね。」

すでに蘭の心は晴々としていた。そのきれいな顔に、コナンは一瞬見とれる。

「あ、あのさ、蘭。ずっと言おうと思ってたんだけど。」

「ん？」

なあに？と優しい目で見つめてくる蘭に、言葉が詰まる。

「あの、えっと…」

「何よ？新一らしくないわね。」

「ずっと、ずっとさ…」

「ずっと…？」

蘭は聞き返した。

「ずっと…」

「……？」

「ずっと…ガキの頃から、蘭のことが好きだった。」

「え…？」

「今まで黙ってて、ごめん。でも、この世界中で誰よりも…愛し

てる。」

「新一……。」

「オレが蘭に告白された時は返事しなかったから、言える権利なんかねえんだけど。返事、聞かせてくれるか……？」

「……わたしこそ、ずっと言えなくてごめんね。わたしも、新一が好き。……大好き。」

そう言った瞬間、瞳から涙があふれてきた。どんどん流れてきて、止まらない。

「うつ、ふえ……」

「おいおい、今日は泣き虫だな。」

「……何よ、新一のせいじゃない。新一があんなこと言うから……」

「ああ。」

「うれし、くて……」

「ああ。」

「しんいち……」

そう言ったと思うと、蘭はコナンの肩にもたれかかって泣き崩れた。

「そうそう、心配なくていいよ。コナン君が新一だってこと、誰にも話さないから。」

すっかり泣きやんだ蘭の第一声がそれだった。

「え？」

今度はコナンが驚く番だった。まあ無理もない。これから知らないフリをしていてくれ、と言おうとしていたコナンの心を見透かしていたかのような言葉を口にしたのだから。

「何驚いてるの？その様子じゃ、まだ事件は解決してないんでしょ？わたしやお父さんにまで隠してたってことは、かなり危険な事件ってことじゃないの？新一が危険にさらされるかもしれないのに、言えないよ。」

「そこまで考えていたとはな…。」

「探偵の幼馴染をなめないでよね。小さい頃、しょっちゅうオニごっこにかくれんぼ、鍛え上げられたし。誰かさんに耳がタコになる

「ぐらいホームズの話聞かされてたし？このくらい予想するの簡単よ。」

「はは。降参、降参。事件の詳しいことは、解決したら話すからよ。」

「うん。」

蘭がそう言った時、事務所の電話が鳴り響いた。時刻はすでに午前1時をまわっている。

「誰だろ？こんな時間に……」

蘭は受話器を取り、耳にあてた。

「もしもし、毛利探偵事務所です。」

すると、意外な人物の陽気な声が聞こえてきた。

『もしもし、蘭ちゃん？久しぶりね〜！』

「お、おばさま！？どうされたんですか、こんな時間に？」

『ああ、ごめんなさいね、こんな非常識な時間に電話して。でも、どうしても新ちゃんと蘭ちゃんのことを心配で。』

「心配って？」

『コナンちゃん……いえ、新一から聞いたんでしょう？体が縮んじやったこと。それで、蘭ちゃんが泣いてるんじゃないか……新一が自分

を賣めてるんじゃないかって心配になってかけたのよ。』

「え？おばさま、どうしてそのこと知ってるんですか？」

『実はね、2、3日前に新一に計画について相談されてたのよ。で、新一が蘭ちゃんの反応が心配だって悩んだから、なんならわたしが頃合いを見計らって電話しようかって提案したの。でも、その心配は無用だったみたいね。』

「あ、はい、まあ…」

蘭は戸惑いを隠せない。

『本当によかった！元氣そうで。そうだ！今度イタリアンでも食べにいかない？来週、高校の同窓会で2、3日帰国するのよ。』

蘭のそばで会話を聞いていたコナンは目を見開いた。

「はあっ？おい、それどーいうことだよ？聞いてねーぞ！」

コナンは蘭の手から受話器をひったくると、叫んだ。

『うるさいわねえ。そんなに大声出さなくても聞こえるわよ。先に教えたらいろいろつまらないじゃない。』

「…いろいろとってなんだよ…。」

コナンの言葉にはもはや力がない。

『今言えるわけないでしょ。それと、人が電話してる最中にいきな

り口を挟まないでくれる？わたしは今、蘭ちゃんと話してたのよ。」

「……」

コナンはあいた口がふさがらなかった。これほどまでに息子に対して自己中心的な母親と、17年も付き合ってきた自分を褒めてやりたい。

『まあ、無事告白も成功したみたいだし？これでわたしも安心だね。』

「ちょ、おい、なんでそれ知って…」

コナンはまたも驚く。

『あら、わたしを誰だと思ってるの？あなたの母親よ、母親！声聞けばだいたいわかるわよ。それに、蘭ちゃんもすっごい嬉しそうだし。』

そばで会話を聞いていた蘭は、真っ赤になってうつむいている。おそらく、新一の告白と自分の返事を思いだしてしまって、恥ずかしいのだろう。そんな蘭の様子を横目でチラリと見たコナンは、受話器を握り直した。

「んで？今回もまた、買い物につき合わなきゃなんねえのかよ？」

『あらあ、よくわかってるじゃない。お願いね。』

「はあ~~~~~…」

『何よそのため息。いいじゃない別に。お金払えって言ってるわけじゃないんだから。そうそう、昨日の電話で頼んだヴィトンの最新バッグは別口でよろしくね』

「へいへい…」

どうやらコナンは有希子とまともに会話する気が失せたらしい。返答に力がない。

『蘭ちゃんに替わってくれる？まだ話があるから。』

その声は相変わらずうきうきしている。これから蘭と長電話を開始するつもりのようなのだ。

「おいおい。蘭は明日学校があんだよ。母さんの長電話のせいで寝坊したらどうすんだよ？」

『大丈夫よ。今日はほどほどに済ませるから。さ、早く早く！』

まるでおやつが待ちきれなくてお母さんに催促する子供のような…。コナンは小さくため息をつく、蘭に受話器を渡した。そして、蘭がいつの間にかテーブルの上に置いていた携帯を手取る。ふと蘭を見ると、2人はすでに長電話に花を咲かせているようだった。

（…）。どうしてこう女つーのは長電話が好きなのかねえ…。

そんな文句も、蘭の楽しそうな横顔を見れば消え失せてしまう。

（でも…ま、いつか。）

「ほどほどにしとけよー！」

そんなコナンの声が聞こえているのかいないのか、蘭は返事をしない。コナンは小さく微笑むと、事務所のドアを開けた。

第3話：告白、そして…（後書き）

初めまして、あるいはこんにちは。林檎の葉です。

今回はやたらと長いですが、我ながらよくできたと思ってます^^
あと、新一の告白のセリフがすごいキザです。自分でもわかってはいるんですが、好きなんですよ〜こういうセリフ。

最後の3分の1ぐらいがギャグっぽくなってしまいました。切ない感じでまとめようと思っていたんですが…あれ〜おかしいな〜？（

↑おい… byコナン）

次がエピソードですが、結構長くなると思うので覚悟しててください。（笑）

よかったら評価お願いします。

エピソード

「おはよう、蘭姉ちゃん。」

蘭がちょうど朝食を作り終えたとき、コナンが部屋に入ってきた。小五郎もあとから続いているので、「新一」とは呼べない。そこで蘭は、2ヶ月半慣れ親しんだその名前を口にした。

「おはよう、コナンくん！昨日はよく眠れた？」

「…それはこっちのセリフ。よく寝坊しなかったね。どうせ夜遅くまで話してたんでしょ？」

コナンはとたんにあきれ顔になる。小声で話しているため、寝ぼけ顔の小五郎には聞こえていない、念のため。

「そ、そんなことないよつ。」

図星を指された蘭は慌てた。が、否定したつもりが、コナンにはお見通しのようだ。

「今日、授業中に寝ちゃっても知らないからね。」

「う…。」

コナンの鋭い指摘に、蘭はたじろいた。そう、まさにコナンの言う通り。昨日、有希子とうっかり話し込んで、寝たのは午前2時すぎ。起きたのは6時過ぎだったから、就寝時間は約4時間ということになる。それは、規則正しい生活を心がけている蘭にとっては、かな

り辛いものだった。実は蘭自身、授業中に寝てしまわないか心配だったのである。

「だ、大丈夫よ！…たぶん。」

「なんか声が小さくない？」

すかさずコナンがツツコむ。

「き、気のせいよ！」

「…ふーん…」

もちろん蘭だつて、コナンに全部バレてしまっているのはわかっていた。でも、好きな人相手にそれを認めたくない、というのがあったのだろつ。とうとう蘭は最後まで認めなかった。

「でもよかった！昨日のことが現実で。」

「え？」

「実はね、ベッドに入ってからずっと心配だったの。全部夢だったんじゃないかって。またはぐらかされちゃったんじゃないかって。」

「蘭……」

コナンは、蘭の思いもよらぬ言葉に言葉を失った。

「でも、現実なんだよね？信じていいんだよね？」

蘭は不安げな顔でたずねる。その気持ちに応えるように、コナンは言った。

「ああ、もちろん。」

「おい、蘭！早くメシ食おーぜ！」

とそこで、小五郎のイラついた声が2人の耳を突き抜けた。

「はいはい、今並べるからちょっと待ってて！」

蘭は反射的に答える。

「なんかおじさん機嫌悪くない？」

「きつと今夜の予定のせいよ。わたしがセッティングしたお母さんとの食事が今日だから。」

「…なるほどね。」

「だから今夜は2人つきりだね。」

「えっ？」

「だって、お父さんとお母さん食事でないし。…どうかした？」

「…いや。」

コナンの背中にイヤゝな汗がつつた。昨日、お互いの気持ちを確かめ合ったばかりの自分たちにがはたして翌日に2人きりで過ごし

ていいものなのかどうか。いや、それ以前に、自分の理性が持つかどうか。第3者からしてみれば、その体で生活している限りあり得ないと思うが…。

「さ、早くご飯食べよう!」

蘭の明るい声で、コナンはふっと我に返った。

(…ハハハ。今日は今日で「ごめん」って言うはめになったらどうすっかな…)

コナンは心の中で乾いた笑いをしながら、食卓についた。

「いただきます。」

エピローグ（後書き）

初めまして、あるいはこんにちは。林檎の葉です。

とうとう完結しました！いや、まさか連載小説をたった2日で完結させてしまうなんて自分でもびっくりです！

わたしの予想通り結構な長さになりました（笑） 短いのを期待して方、すみません！><

このエピローグは、

「でも、現実なんだよね？信じていいんだよね？」

という蘭のセリフが書きたいがために書きました。

理由はそれだけです、はい（笑） 2人がその夜どうなったかは、皆さんのご想像にお任せします。まあ、コナンがやたらと疲れただけだったとは思いますが…（笑）

次は短編に挑戦したいと思います。わたしの小説、1話分が長いので1話で収まるかどうかは謎ですが…頑張ります！
よかったら評価お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6194e/>

もう限界。

2011年1月16日06時29分発行